

王三慶 莊雅州
陳慶浩 內山知也

主編

日本漢文小說叢刊

第一輯
神怪傳說類·講史類

臺灣學生書局印行

王三慶 莊雅州
陳慶浩 內山知也
主編

日本漢文小說叢刊

第一輯 第四冊

神怪傳說類

講史類

浦島子傳

太平記演義

續浦島子傳記

西征快心編

日本七福神傳

海外異傳

含錫紀事

昔昔春秋

警醒鐵鞭

國立中正大學語言與文學研究中心
國立成功大學中國文學系
日本財團法人斯文會
法國科研中心中國文化研究所

出版

蔣經國國際學術交流基金會 贊助

《日本漢文小說叢刊》第一輯

第四冊 目錄

神怪傳説

浦島子傳	1
續浦島子傳記	17
日本七福神傳	43
含錫紀事	73
昔昔春秋	105
警醒鐵鞭	139

講史

太平記演義

西征快心編

海外異傳

375

347 199

神怪傳説

浦島子傳

《浦島子傳》 中文出版說明

《浦島子傳》一卷，作者不知何人，唯元錄十一年（西元一六九八年）戊寅三月木下順菴於內書曰：「右《浦島子傳》不知何人所作，奇聞華靡，無檢束，想夫古之搢紳家學白香山而失於俗者也。而傳寫年久，其間誤字闕文，往往有不可讀而通焉，餘暇日，反覆考訂，誤者正之，闕者補之，為一篇文字也。蓋取其事之本《萬葉》歌詞，而有可傳者爾。文之巧拙不在所論云。」故知為日本特早之漢文敘事作品，今從群書類從本中選出。

本事乃敘說古仙人浦島子釣魚澄江，曳得靈龜後，眠宿于舟中。夢間，靈龜化一絕世神女，攜與共登蓬萊，歷盡神仙世界。然而不免會有思凡歸鄉之念，因此，神女送島子以玉匣，並囑莫發露，方有再見之期。等到其歸來故鄉後，人事已經全非。途中又遇百歲老嫗，始提及祖父傳言。於是島子乃悟所謂天上一日，人間千年。精神恍惚之間，開及玉匣，但間一片雲霧升空而去，以違諾言而與神女再無聚會之期，但成地仙而已。全文蓋如《劉阮訪天台》或《桃花源記》及《遊仙窟》之類型故事。

文末云：「所謂《浦島子傳》，古賢所撰也，其言不朽，宜傳於千古，其詞花麗，將及於萬代，而只紀五言絕句二首和歌，更無他艷，因之不堪至感，代浦島子詠七言廿二韻，以三百八字成篇也，名曰：《續浦島子傳記》，于時延喜二十年庚辰臘月朔日也。」，據此可知，所謂續者

非續其事也，乃歌詠浦島子之詩歌。宋題：「永仁二年（西元一六九八年）甲午之八月廿四日，於丹州筒河莊福田村寶蓮寺如法道場，依難背芳命，不顧筆跡狼籍，馳紫毫了。」則寫傳者似為依難，違背其師父芳命，也不顧筆跡狼籍，把他抄錄傳世。今從群書類從本第三百三十五卷錄出。

木下順菴，字直夫，小字平之元，號錦里，又號順菴，諡恭靖，平安人。順菴又彊記，善讀書寫字。海大師見而撫之曰：「此而異質」，即欲以法嗣教之。順菴不從。年十三，作《太平賦》，詞旨淳正，世以為國瑞。後大納言烏丸公上之光明帝，帝覽大為稱賞，將錄用之，會公車晏駕不果。既入松永昌三門，勤學勵行，日進月修，昌三期以大器，一時名士如貝原益軒、安東省菴、宇都宮遯菴，不敢與之爭鋒，咸推舉之。

少來江戶從某侯，不得志歸京，於是閉戶讀書，久而名震海內。家賀侯厚幣召之，辭曰：「先師松永先生之子某嗣承家學，未就仕途，家道屢空，請用彼，得其宿望。」侯聞之曰：「今世之交，親同手足，誼固金石之比，於利害之際，崖岸相向者比比皆是，如順菴實有故人之節。」於是與松永之子俱禮聘之。越若干年，蒙簡拔為大府儒員，十年六十二，實天和二年七月二十七日也。物徂徠曰：「錦里先生出，搏桑之詩皆唐。」服南郭曰：「錦里先生實文運之嚆矢，其詩雖不甚工，卻手唱唐音。」又聞先生常言：「如不熟讀《十三經註疏》，不可謂通經。」由此觀之，先生亦所謂古學之開基祖。

室鳩巢致答嶮正修書曰：「恭靖先生在京時，酷愛韓文，無日不讀，出輒每以韓文自隨。及晚年東遷之後，又愛王守仁文，常以其及置傍。一日僕語曰：『舜水朱子，甚敬守仁，得其文，必改容稱嘆。』」

順菴為一世敬慕，遠邇納贄及門者不可勝數，而多出成德達材者，宇土新稱，滿門桃李。元

祿戌寅十二月二十三日歿，享年七十八。❶

【注】

❶ 參見《漢學者傳記叢書》，第六〇—六三頁。

《浦島子傳》 日文出版説明

『浦島子傳』一卷。作者は不明。元禄十一年（一六九八年）戊寅三月、木下順菴が次の様に記すのみである。

「右『浦島子傳』はいずれの人の手によるものか分からない。かの知識人・白樂天を想起させるが、俗気は無い。しかし長いこと受け継がれる間に、誤字や欠文がしばしば見え、文意が通らない所があつた。休日に、校勘作業を繰り返して、誤りは正し、欠けたものは補い、一篇の文学にした。思うに、このストーリーは、『万葉集』内の歌詞に基づいており、それで伝えられてきたのであろう。文の巧拙は今論じない。」

故に、日本における特に早い漢文叙事作品であることが分かる。今は『群書類従』本に従いテキストとして選んでおく。

本書は、いにしえの仙人・浦島子が水辺で魚を釣り、靈龜を曳き得たのち、船中にて眠りに就くことが、述べられている。夢の中、靈龜は絶世の神女と化す。ふたりは手を携えて共に蓬萊へと登り、神仙世界をめぐる。しかし、望郷の念にかられて、そこで神女は浦島子を送り

玉手箱をさずけた。そして、決して開けてはなりません、そうすれば再会の時があります、と告げた。故郷に帰ってみると、世の中はまるっきり変わっていた。途中、百歳の老婆に遭い、そこで祖父が言い伝えたという話を聞くに至った。ここにおいて、浦島子はようやく、いわゆる「天上の一日は、人間世界の千年」たることを悟った。ぼんやりとして、玉手箱を開くと、一片の雲霧が昇り去っていった。そうして約束に違ひ、神女と（天仙として）再会する時は無くなり、ただ地仙となったのであった。全文は、思うに、「劉阮、天台を訪ぬ」あるいは「桃花源記」と「遊仙窟」のようなタイプの物語だと言えよう。

文末にて「いわゆる『浦島子伝』とは、いにしえの賢者が撰じたものであり、その言語は朽ちることなく、千古に伝わるに相応しかつた。その言葉も華麗にして、万代に及ぶほどであった。しかし、五言絶句と二首の和歌を記すだけで、ほかに艶やかさは無く、感動するまでには至らぬ程だったので、『浦島子』に代わって二十二韻の七言詩を詠み、三百八字から成る一篇をつくつたのであった。名付けて『続浦島子伝記』。時に、延喜二十年、庚辰臘月朔日のことである。」と記す。このことから、『続』と言つてもストーリーの続編ではなく、浦島子を詠つた詩歌であることが判る。最後に「永仁二年（一〇九八）甲午の八月二十四日、丹州筒河莊、福田村、寶蓮寺の如法道場において、依難背命に背きがたきにより、字が下手であることも顧みず、筆を走らせた次第。」と書いてあることから、筆録者は、その師の命に背きがたく、字が下手なものも顧みず、抄録して世に伝えたのであった。今は『群書類従』本の第一三五巻に従う。

木下順菴は、字は直夫といい、號は錦または順菴といった。諡は恭靖で、平安の人である。

順菴はその上、記憶にすぐれ、書を読み字を書くのに優れていた。若くして江戸に来て、ある侯に従ったが、志を得ず帰京、ここにおいて、部屋に閉じこもり書を読み、しばらくして、その名が世の中にとどろいた。元禄戊寅十二月二十三日に没し、享年七十八歳だった。

(佐藤浩一・訳)

物也。誰不哀憐者哉。

浦島子傳〔舊本真書舛〕

當雄略天皇二十二年。丹後國水江浦嶋子。獨乘船釣靈龜。島子屢浮浪上。頻眠船中。其間靈龜變爲仙女。玉鈿映海上。花貌耀船中。迴雪之袖上。迅雲之鬢間。容貌美麗而失魂。芳顏薰牀克調。不異楊妃西施。眉如初月出娥眉山。唇似落星流天漢。水島子問神女曰。以何因緣。故來吾扁舟中。哉。又汝棲何所。神女答曰。妾是蓬山女金闕主也。不死之金庭。長生之玉殿。妾居所也。父母兄弟在彼仙房。妾在世結夫婦之儀。而我成天仙。樂蓬萊宮中。子作地仙。遊澄江滙上。今感宿昔之因。隨俗境之緣。子宜向蓬萊宮。將遂曩時之志願。令爲羽容之上。

卷第百卅五 浦島子傳

仙。島子唯諾。隨仙女語。須臾向蓬山。於此神女與島子。携到蓬萊仙宮。而令島子立門外。神女先入金闕。告於父母。而後共入仙宮。神女並如秋星連天。衣香馥々。似春風之送百花香。珮聲鏘々。如秋調之韻。萬籟響。島子已爲漁父。亦爲釣翁。然而志成高尚。凌雲彌新。心雖存強弱。得仙自健。其宮爲牀。金精玉英敷丹堦之內。瑤珠珊瑚滿玄圃之表。清池之波心。芙蓉開脣而發榮。玄泉之涯頭。蘭菊含咲不稠。島子與神女共入玉房。薰風吹寶衣。而羅帳添香。紅嵐卷翡翠。容帷鳴玉。金窓斜素月射幌。珠簾動松風調琴。朝服金丹石髓。暮飲玉酒瓊漿。千葉芝蘭駐老之方。百節菖蒲延齡之術。妾漸見島子之容顏。累年枯槁。逐日骨立。定知外雖成仙宮之遊宴。而催故鄉之戀慕。宜還舊里。尋訪本境。島

九百七十五

子答云。暫侍。仙洞之霞。常嘗。靈藥之露。液。非。是我幸。乎。久遊。蓬壺之闌。峯。恣甘。羽客之玉盃。非。是我樂。哉。抑神女施施。範島。翫夫密進。退。在。左右。豈有。逆。旨。乎。雖然。夢常不。結。眠久欲。覺。魂浮。故鄉。淚浸。新房。願吾暫歸。舊里。即又欲。來。仙室。神女宜。然哉。與。送玉匣。以。五綵。絨。以。万端之金玉。誠。島子。曰。若欲。見。再逢之期。莫。開。玉匣之絨。言了約成。分。手辭去。島子乘。船。如。眠自版去。忽。以至。故鄉澄江浦。尋不。值。七世之孫。求。只茂。芳歲之松。島子齡于。時。二八歲許也。至。不。堪。披。玉匣。見。底。紫煙昇。天。無。其賜。島子忽然頂。天山之雪。乘。合浦之霜。矣。

續浦島子傳記〔舊本真書跡〕

承平二年壬辰四月廿二日甲戌。於。勘解由曹局。注。之。坂上家高明耳。

浦嶋子者。不。知。何許人。蓋上古仙人也。齡。一有。過。三百歲。形容如。童子。為。人好。仙。雖。字。奧。一。作。秘。術。也。服。氣。乘。雲。出。於。天。藏。之。閩。陸。沉。水。行。閉。於。地。戶。之。扉。以。天。為。幕。遊。身。於。六。合。之。表。以。地。為。席。道。懷。於。八。埏。之。垂。一。天。之。蒼。生。為。父。母。四。海。之。赤。子。為。兄。弟。形。似。可。咲。而。志。難。奪。者。也。獨。乘。釣。魚。舟。常。遊。澄。江。浦。伴。查。郎。而。陵。銀。漢。近。見。牽。牛。織。女。之。星。逐。漁。父。而。過。汨。灑。親。逢。吟。澤。懷。砂。之。客。於。是。釣。魚。之。處。曳。得。靈。龜。也。嶋子心神恍忽不。寤。寐。浮。於。波。上。眠。於。舟。中。敞。然。之。間。靈。龜。變。化。忽。作。美。女。絕。世。之。美。麗。希。代。尤。物。也。玉。顏。之。艷。南。威。障。袂。而。失。魂。素。質。之。閑。西。施。掩。面。而。無。色。眉。如。初。月。出。於。蛾。眉。山。儼。似。落。星。流。於。天。漢。水。

《浦島子傳》 目 錄

《浦島子傳》 中文出版說明	一 七 三
《浦島子傳》 日文出版說明	一 七 三
書影	一 七 三
浦島子傳	一 五